ラジオ放送

＜令和元年7月～令和元年9月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.428

もくじ ～ *contents*

＜教師インタビュー＞

☞金光教の先生へのインタビュー番組

●言葉を口にできる喜び
大阪府・高槻教会　大宅　潔　*page 1*

●何もせんでいい
三重県・伊勢教会　濱出　進　*page 6*

●原因不明
福岡県・大隈教会　石井俊介　*page 11*

＜平和＞

☞戦争体験者のお話

●生きて帰ってこい
岐阜県・南大垣教会　菱田英一　*page 17*

＜ラジオドラマ＞「坂下の小さな店で」

☞「困っても困らない生き方」がテーマのラジオドラマ

●第１回　春ですもの　*page 22*

●第２回　青空みたいに　*page 28*

●第３回　釣れますか？　*page 34*

●第４回　お茶にしましょ。　*page 39*

●第５回　捨てちゃえ捨てちゃえ　*page 44*

●第６回　月の美しい夜に　*page 50*

●第７回　ヤッちゃんの修行　*page 56*

●第８回　餅つきの後で　*page 61*

●最終回　春よ来い　*page 67*

《教師インタビュー》

「言葉を口にできる喜び」

大阪府・高槻教会　大宅潔

ナレーション

皆さんは、「吃音症」という障害をご存じでしょうか。吃音とは、言葉が詰まったり、スムーズに話すことができない障害で、明確な原因や治療法もなく、およそ100人に1人の方が吃音に悩まされています。

大阪府高槻市にある金光教高槻教会で奉仕する大宅潔さんは今年83歳。大宅さんも、幼い頃に吃音症で大変つらい毎日を送っていました。

大宅

幼稚園も家のすぐ裏でしたが半分くらいしか行っていません。そして、小学校に入りました。でも、やっぱり悲しいかな、当てられたり、国語の時間なんか、順番で本を読まなければなりません。だから、逃げ出したいような心境でしたけれども、余計緊張するわけですよ、次は自分の番だと思うとね。言葉が出てこない…。

カ行、サ行、タ行、これが言いにくいんです。どういうわけか詰まるんです。

ここは、高槻市高槻町なんですよ。タチツテトでしょ。言いにくい。だから、「住所は？」と聞かれると、これがまた困るんですよね。

ナレーション

うまく話せない不安から、人と接するのが怖くなり、学校も休みがちになりました。そんな

中、ある出会いがありました。

大宅

そういう状況の中で、４年生、５年生、６年生と持ち上がりで、クラスを持ってくださった担任の先生が北門（きたかど）先生なんですよ。私は６年生になった時、この先生に呼ばれて、「来年は中学やな。大宅、このままだったら、おまえ困るだろう？　今までのおまえを見ていたら、自分から逃げておる」と言われました。ズバリですよ。「治すんやったら今や」と。

それで、明くる日に先生がみんなに、「今から言うことをよく聞いてもらいたい。君たちは自由に話ができるだろう。大宅は違う。話ができない。来年中学になると困ると思う。だから、ここでみんな協力してやってもらいたい。息を吸って、静かに言えば、言葉が出てくる。それを大宅がみんなと一緒に稽古して吃音矯正をしてやりたい。よろしく頼むな」ということを言われたんですよ。

それがきっかけで、休み時間になったら、誰か私を捕まえて、相手になってくれるんです。「大宅、話をしよう」とね。

私が慌てて言おうとすると、「落ち着いて」と言うてくれるんですね。ありがたい。だからだんだん楽しくなってくるんですよ。そうすると自信が湧いてくるんですね。積極的に対話ができるようになってきて、うれしかったですねえ。ですから1年くらい掛かりましたけど、ありがたいことに矯正できたんですよ。

卒業の時に、教壇に立って、「僕はこの１年間、いいクラスに恵まれ、今こうして普通にお礼の言葉を言えるということはありがたいと思います。本当にありがとうございました」とお礼が言えました。みんな拍手してくれましてねえ。

ナレーション

その後、不自由なく学生生活を送り、やがて成人し、就職もできました。お母様は、「いずれは金光教の教師になって人を助けるお役に立ってほしい」という思いがありましたが、大宅さんは、なかなかその気にはなれませんでした。そんな中、お父様が病気で亡くなりました。後日、お葬儀を仕えてくれたお父様の師匠の所へお礼に行くと、思わぬ言葉を掛けられました。

大宅

「過日はありがとうございました」とお礼申し上げたんです。そうすると、私は名前が潔と言うんですけど、「潔なあ、親とはありがたいなあ」と言われる。「おまえのことはな、親父は一生懸命願っとったぞ。教会帰ったら、ご祈念帳を見てみろ」と言われる。「ご祈念帳？　はい」。

それで、帰らせてもらって、改めてそのご祈念帳を見たら、父がね、日付の後に…私はねずみ年なんですが、「子（ね）の年の氏子、御用成就御願い奉ります」ということを書いていました。名前は書いてないですが、私のことです。それ

をずっとさかのぼってみたら、もうかなり前から私のことを願ってくれてるんですね。もう入院する際になりましたら、字が乱れてるんですよ。それを見た時、「ああ、ここまで親の心を痛めてたんやなあ」と思いましたね。申し訳ないなあと思いました。

父は、１回も跡を継げとか金光教の教師になれとは言わなかったですから、それだけに余計私はそれを思うんですね。ずーっと願い続けてくれた…ありがたいなあと思います。

ナレーション

親の祈りの中での今の自分であることを自覚した大宅さん。その願いを胸に、父の跡を継ぎ、金光教教師として今日まで人助けの御用に励んでこられました。

先日、小学校の同窓会が開かれ、卒業してから30年ぶりに担任の北門先生と再会しました。

大宅

もう老齢ですわ、先生もね。私があいさつに行ったら、「大宅、今何してるんや」と言われたので、「ああ、金光教の教師をさせていただいております」と言いました。そしたら先生が、「親孝行できて良かったな」とはっきり言ってくださいました。「ありがとうございます」と言うてね。うれしかったですねえ。

だから、あの先生に出会わなかったら、今の自分はないなあと、いつも思うんです。

その陰にね、両親の祈り願い…。だから、私

はつらかったけれども、そのことを通して、人と人との触れ合いの大切さ、人に対する思いやりを教えてもらいました。

私に対して、いろいろと思いを掛けてくださった人たちのことを思った時に、ありがたいなあと思いますしね。

人それぞれ違いますけれども、みんないろんな問題を抱えております。本人さんが一番つらいんです。だから、本人さんの気持ちになって、周りの方が優しく寄り添ってあげる。それと、祈り。これがやっぱり大きな働きになると思います。

ナレーション

大宅さんは、どこでお会いしても、いつもニコニコ笑顔で接してくださいます。誰に対しても丁寧な言葉遣いをされます。それは、言葉を口にできる喜びを、誰よりも知っているからこそのお姿なのだと感じるのです。

《教師インタビュー》

「何もせんでいい」

三重県・伊勢教会　濱出進

ナレーション

三重県伊勢市にお住まいの濱出進さん、72歳。濱出さんは、代々金光教の信心をする家庭に生まれました。現在濱出さんは、建築設計事務所を経営し、ご自身も一級建築士として活躍されています。

濱出さんは、40代で伊勢市内の歴史的な町並みの保存に携わるなど、とても順調に仕事に励んできました。しかし、48歳の時、バブル崩壊が起こり、世の中に不況の波がやってきました。

濱出

バブルはじけるまでやから、いやが応でも、断るぐらい仕事は頂いていたわけですよ。仕事も順調に来てたのですけど、バブルが崩壊して、やっぱり仕事がすごく無くなってくる。役所の仕事なんかも、全然入らないというような状況になってきて、段々気分も落ち込んできました。それでうつ病と診断されたんです。

とにかく、うちは元々、所員が7人ぐらいいて、その人たちの給料をどうしようこうしようで、たぶんうつ病になったと思うんですよ。毎月1千万以上のお金を何とかしようとして、やっぱりどうにもならないと行き詰まってしまいました。

ある方が大阪の病院を紹介してくださったん

です。いろいろ調べてもらって、脳波を調べていただいたりして、「うつ病ですねえ。ガンで言うたら末期症状。治りにくいなあ」と言われました。

「さあ、どうするか」ということになったわけです。

ナレーション

思ってもみなかった事態に陥り、濱出さんは困りました。仕事が激減した中で、どうしたら従業員と家族を路頭に迷わせなくて済むだろうか、自分が何とかしなければいけないと思い悩むのですが、仕事は増えず、自分の病気も良くなりません。

その時、思い出したのは、以前から知り合いだったある教会の先生のことでした。

「あの先生だったら、何とか助けてくれるかもしれない」と、濱出さんは先生のところまで訪ねていきました。

濱出

先生をふと思い出して、お参りさせてもらったんですよ。

そうしたら先生が、人を助けることも大切やけども、あんたが助かってへんのやろ。だからあんたが助からなあかんわな。だから、あんたが助からんことには家族…奥さんもそうだし、子どもたちも助かっていかんわな。だから、まず第一に、「我が身の上におかげを十分受ける」ということをせなあかんわなあと。じゃあ、何

をしたらいいんやって言ったら、「何もせんでええ」っておっしゃるんです。「私が全部引き受ける。何にもせんでもええ。今までずっと続けてきた朝参りもせんでもええ。教会もお参りせんでええ。その代わり私が一生懸命御祈念させてもらうからな。あんたが我が身の上におかげを頂くように私が責任持つから、あんたは何もせんでもええよ」ということをおっしゃってくださったんですよ。

やっぱり人って不思議なもんで、「何にもせんでええ」って言われると、「ああ」って…そういうことを気が晴れるというたらおかしいけども、解かれるとか放たれるというか、そういうようなところがあって、「本当に助かったなあ」という気がしましたね。

「ああ、お任せしていいんだな。あ、肩の荷が下りた」と思いました。

ナレーション

このことがあって、濱出さんは病院に通いながらも仕事を続け、その折々に先生の所へお参りに行くようになりました。

教会にお参りすると先生は、「よく来たな。ゆっくりしていきなさい」と言ってくださり、濱出さんは本当に何もせず、教会でただただのんびりするだけだったそうです。食事を頂き、時には教会に泊めてもらって、とにかく心と体を休めさせてくれました。

そういうお参りが濱出さんにとって、本当にホッとできる時間でした。何か神様に守られて

いるような、神様に包まれて休んでいるような、そういう心持ちがしたそうです。

濱出

そこで徐々に良くなってきたんです。段々に薬を頂きながら、先生の所へ泊めていただいてお話を聞かさせていただいたりとか、そういうことをしながら、まあ薬が切れるまで7年掛かりましたけどね。7年掛かった間に、どうにかこうにか、お医者さんが「まあ治りにくいな」というのが、7年掛かってうつ病を脱することができたわけです。

ナレーション

濱出さんは、自分がうつの時でも、仕事は不思議と続けることができたと振り返ります。苦しい状況でも、いろいろなところから仕事を頂くことができた。それは決して自分の力ではなく、やっぱり神様が守ってくださっていたのだと、そのように話してくださいました。

濱出さんに、「同じような状況で苦しんでいる人たちに、自分の経験を通して何か伝えられることがありますか」と尋ねてみました。

濱出

自分が助かりなさいよと。悩み苦しんでる人って目先のことしかやっぱり分からないのですよ。目先のことを放さなあかんわけですよ。悩むのは当たり前。誰でもしょうがない。いろんなことを迷うんは、これが人間なんやと。これ

は当たり前のことと違うかと。
けども、自分ではできないから、やっぱりそこで神様という存在がやっぱりある。だから、「神様、何とかしてください。何とかしてくださいい」とお願いしたら、何とかしてくれるのが神様だと思う。この神様だと思う。そこだと思うんですよ。
私はそれで今生かしてもらってるんで。

ナレーション
うつで苦しかった時、お世話になった先生だけではなく、いろんな人たちが助けてくれたそうです。家族、友達、いろんな人の祈りがあって今日までくることができた、その恩に報いる自分でありたいと願う濱出さんでした。

《教師インタビュー》

「原因不明」

福岡県・大隈（おおくま）教会　石井俊介（いしいしゅんすけ）

ナレーション

今日は、原因不明の熱で、２年もの間ほぼ寝たきりになった状態から、信心によって助けられたある青年の体験を紹介します。

福岡県、大隈教会の石井俊介さん、36歳です。

金光教の教会に生まれた石井さんは、高校を卒業後、リハビリの仕事をするため、専門学校に通っていました。

卒業を控えた21歳の時です。病院での実習で忙しくしていたある日、突然高熱が出ました。

石井

疲れているのかなと思いながら行ってたんですけども、いつまで経っても熱が下がらない。下がりませんから段々きつくなってくる。いろいろ検査していただいたのですけども、何が原因か分からん。「まあお薬を出しとくんで、これが駄目なら次はこれというような感じでやっていきましょう」ということでした。ずっと熱は下がりませんでしたが、それでも実習はずっと続けて、病院にも行っておりました。

ナレーション

無理を押して実習に通っていましたが、とうとう起き上がれなくなりました。

石井

その状態がずっと続いたまま実習をしておりましたから、体もぼろぼろ。そんな状態で無理に一生懸命やっておりましたんで、心も折れてしまうようになりました。

それからもうこのまま実習を続けるのは難しくなって、教会の方に戻ることになりました。

それからもずっと熱は続いておりまして、結局２年弱ぐらいですね、ほぼほぼ自分の部屋から出られないような状態が続いていました。

ナレーション

心も体もぼろぼろになり、専門学校を辞め、実家である教会に帰った石井さん。教会に帰ったものの、高熱は続きます。しかも、「原因不明」と言われるほど怖いものはありません。そうした不安感と、ほとんど寝たきりで、動きたくても動けない悔しさで心がいっぱいになり、とてもつらい生活を送っていました。

そのつらさは、家族にもなかなか分かってもらえないもので、そのことが石井さんの心を一層苦しめるのでした。

石井

母が、「ああしてみては。こうしてみては」と私にいろいろと言うんですけれども、いや、できてたら、とうにしてると。それができないから悔しいしつらいし、でもそれはなかなか元気な人には分かってもらえない。親子であってもなかなか分かってもらえないんです。本当に

家族もいろいろ心配もしただろうし、つらい思いをしていただろうと思うんですけれども、私も理解してもらえないということで、お互いにつらい思いをしてたと思います。

ナレーション

そんなお互いがつらい思いを続ける中でのある日のこと。お父さんから、「お広前の掃除をしないか」と誘われました。

お広前というのは、神様をお祀（まつ）りしている場所で、お参りに来た人がお祈りをしたり、先生から話を聞く場所のことです。

石井

本当に体力も何もなくて、できるだろうかなあと思いながら、お掃除をさせていただいたわけです。

普段は疲れてしまうのですけれども、その時は不思議と体が軽くなるような、むしろ元気になるような。心も、同じように明るくなるというか、浮いてくるというか、軽くなる。そういうような気持ちにならせていただきました。本当に今振り返ると不思議な体験で、ありがたいなと思わせていただきますね。

お掃除させてもらうお広前を見せていただきましたら、本当に光って見えるというか。

その時に、「私の力でさせてもらってるんじゃない。神様にさせていただいているから、私は今お掃除ができてるんだなあ。神様がここにあるなあ」と感じさせてもらいました。

ナレーション

「自分には何もできない」と思っていただけに、お広前の掃除ができたことで、石井さんは、確かに神様がおられること、神様のありがたさを体感しました。

その後、「もっと神様のことを知りたい」と思うようになり、体調の良い日には、金光教の本を読むようになりました。

ある日、石井さんは、こんな話を読みました。

「ある人が金光教の教祖様の元にお参りした時、『あなたがお亡くなりになったら、これから私たちはどうすればいいのでしょうか』とお伺いすると、教祖様は、『心配することはない。形を隠すだけである。体がなくなれば、願う所に行って人々を助けてやる』とおっしゃった」

という教えに出合いました。

石井

それを読ませていただいた瞬間、「ああ、助かった」と、本当に涙が出るような思いをしました。

神様がここにおられるということが分かった。そして、み教えを読ませていただく中で、人が立ちゆく、人が助かっていくということがずっと書かれておりました。神様と一緒になって、教祖様も、お願いすれば行ってやると。これほど心強いと思ったことはないですね、本当に。

ナレーション

　2年という長い時間苦しんだだけに、「願う所に行って助けてやる」という言葉がとても強く心に響き、「自分も助けてもらえるんだ」と大きな勇気をもらった石井さん。それから少しずつ体調が良くなり、3カ月が経つ頃には、普段の生活ができるまでになりました。

　その後、石井さんは、自分のように苦しんだ人に助かってもらいたいと、金光教の教師になりました。

　そして、自分の体験を通して、こんなことが分かったと言います。

石井

そのつらかったことがあるから、そのつらいことをもって、同じように苦しんでる方のつらさを一緒に分かる。そのことを神様に願うことができるんじゃないかな、そのつらさが人を願うことにつながるんじゃないかなというふうに、今は思わせてもらってます。

それは、あの経験がなければ今も分かってはいなかったなというのは思います。

ナレーション

　最後に、「今、目の前に、同じようなつらさを持つ人がいたら、どんな言葉を掛けますか？」と尋ねると、「あなたのそのつらい思いは、神様が全部聞いてくれますよ。だから大丈夫ですよと伝えたい」と答えてくれました。

　そこには、「神様のおかげで乗り越えられた」

という石井さんの実感がこもっていました。

《平和》

「生きて帰ってこい」

岐阜県・南大垣（みなみおおがき）教会　菱田英一（ひしだえいいち）

ナレーション

第二次世界大戦後、シベリア抑留で強制労働をさせられた菱田英一さん。大正12年生まれの95歳です。岐阜県大垣市で生まれ、７人兄弟の長男でした。

子どもの頃はバスケットボールが大好きで、長男ということも影響してか、何かとリーダーにさせられることが多い少年時代でした。

高等小学校を卒業した後は、大家族の家計を助けるために就職しましたが、より安定した収入を得るために、17歳で陸軍造兵廠（ぞうへいしょう）で働くことにしました。そして昭和19年1月、20歳の時に召集を受け、満州へ送られることになりました。

菱田さんは厳しい訓練の後、戦車の操縦士となりました。終戦間際の7月、ソ連は菱田さんが所属する部隊へも攻め込んできました。突然の機銃掃射を受け、多くの仲間が戦死する中、菱田さんはかろうじて銃撃を免れました。

そして8月15日、終戦となりました。部隊は大きな広場に集められました。上官から敗戦を告げられ、シベリアを経由して日本へ帰るということが伝えられました。

菱田

何十万という人が、シベリアへ入られんでし

よ。だから、徒歩で行く部隊と、列車で行く部隊と、車で行く部隊と、３つに分かれたんです。一番クジ運が悪かったんですね。歩いて行ったんです。ウラジオストクから帰るという話だったんです。

ナレーション

大量の荷物を背負い、山の中を1日に40キロほど歩く日もありました。雨の日も休まず、キャンプをする目的地を目指しました。しかしそのキャンプ地は、先に出た部隊の残骸などの異臭が漂い、ゆっくり眠ることもできませんでした。

菱田

いっぱい人が死んだり、倒れたり…。もう汚物がいっぱい。もうとんでもないとこやね。もう、生き地獄みたいなもんやね。

ナレーション

20日ほど歩いてソ連側の町に着き、そこからは列車で移動するとのことでした。仲間たちと、右側へ進む列車に乗れば日本に帰れると喜びました。しかし…。

菱田

いよいよ日本へ帰るというところ、汽車に乗った。すると、「左に行く」と。おかしい。「何で左に行くんや」と聞いたら、「これから強制

労働や」と。それでみんな、バタバタっと倒れたですね。

ナレーション

　通訳をしていた戦友から、ソ連兵の話の内容はすぐに伝わりました。絶望のあまり、この地で死んでしまった者もいました。

　日本とは反対側の、ハバロフスクの近くの町に着き、強制労働が始まりました。

　主な作業は木材の伐採でした。高さ20メートル、直径2メートル以上の大木を、２人でのこぎりをひいて切り倒します。それを川の下流まで流し、そこから極寒の川の中に入り、10人以上で木材を引き揚げ、貨物列車に積み込むという作業でした。

過酷な作業にはノルマが課せられ、昼夜を問わず、1日10数時間にもなり、呼び出されれば、夜中でも関係なく働かされました。

　睡眠不足や栄養不足で、菱田さんも作業中に大けがをしました。仲間たちの中には精神を病む者も少なくありませんでした。残念ながら、多くの仲間が死んでいきました。

　収容所では、２百人から3百人の日本人の責任者として、「収容所長」という役職がありました。菱田さんに、その4代目として白羽の矢が立ちました。

菱田

**　なってしまったんよ。それで私は、このままではあかんと思って、みんなに言うた。「とに**

かく元気で、生きて帰ろう。持っとる所持品を全部出してくれ。それを何とか使う」。賄賂ですね、極端に言えば。だからみんな持っとる指輪とか形見の物、どうせ取り上げられてまうと…窮余の一策やわね。それからガラッと変わった、ソ連の態度が。それから、楽になった。それが一つの分岐点ですね。

ナレーション

こうして呼び掛けたのには理由がありました。菱田さんが生まれ育った家の隣は、金光教の教会でした。

金光教南大垣教会の初代の教会長先生は一回り年上で、お兄さんのような存在でした。その先生から出征直前にひと言言われました。

菱田

「お前ちょっとここ座れ。言いたいことがある」「はい」「何があっても、生きて帰ってこい」。こう言われた。「ええ？　生きて帰ってこいって、どうすんの」。そんなこと、夢にも思っとらんですしねえ。けども、そのことが、シベリアからずっと何としても帰らなという気持ちがあったんですね、私。あれをもし聞かれたら、えらいこっちゃですよ。うん。言われた時、びっくりしたですね。

ナレーション

「生きて帰ってこい」。この言葉に支えられました。

その後、夜中の労働はなくなり、国際赤十字

の介入もあり、食事も以前より栄養価の高い物が与えられるようになりました。

日本へ帰る日は、３年が経ったある時、突然やってきました。ナホトカ港から日本に帰った時は、みんな号泣でした。

大垣に帰ると、家族は赤飯を炊いて迎えてくれ、教会の先生も喜んでくれました。

両親も金光教の信心をしていました。特にお母さんの言葉から、平和に対する思いを振り返ります。

菱田

母はいつもこう言ってましたわ。「私たちは、教会へお参りして、お願いして、祈る所があるでええなあ。我々は恵まれとるでええなあ。幸せやなあ」ということを絶えず言ってました。私はそれが元なんですわ。

私は、「難しいこと言わんでも、天と地の恵みの中で生きとるんや。天の恩、地の恩さえ知りゃあええんや」といつも言います。それが平和につながってくるような気がするんですわ。

ナレーション

菱田さんは、「生かされた」という思いを大切にして、次の世代のためにも一生懸命に働きました。また、私財を投じて、日本と中国の民間交流を行うなど、国際的な橋渡しも担ってきました。

少し足が不自由になった今も、平和への願いは変わりません。

《ラジオドラマ》

坂下の小さな店で

脚本　菊村禮（きくむられい）

第1回

「春ですもの」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人

瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫　元小学校の校長

大橋一樹　（40代）　設計士

客

ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの　（M…モノローグ）ここは町外れです。なだらかな丘があり、坂道を下った所にある何でも屋「坂下の店」をやっている私は瀬戸内しげのといいます。70歳です。

しげの　（M）３月も終わりとなりました。

しげの　いつもの背広じゃまずい？　三つぞろいにしましょうか？

修　造　（笑って）卒業式じゃあるまいし。

しげの　（M）夫の修造です。２つ年上です。60歳まで小学校の校長先生を勤め、その後は不登校の子どもを支える仕事

をしてきましたが、今日でそのお役目も終わりとなりました。ご苦労様でした。

修造　じゃ行ってくる。

しげの　持ったの？

修造　え、何を？

しげの　夕べ書いていた…ホラ！

修造　あ、お礼の言葉か。忘れてた。えーっと…（奥の部屋へ）

しげの　急いで！

修造　うん。じゃ！

しげの　気を付けてね。…ああっ、お、お弁当！　…忘れて…！

客　ごめんくださーい。おみそ下さーい。

しげの　ハーイ。どうぞ。

客　いつもありがとうね。

しげの（M）　おなかがすいたなあ。あ、お昼だわ…そうだ！　さっきのお弁当！

一樹　…あのー、スミマセーン。

しげの　いらっしゃいませー。

一樹　お弁当。置いてますか？

しげの　カップラーメンしか。お湯ならあるけど。

一樹　（弱って）…あの、おにぎり、とかは？

しげの　それもあいにく。見掛けない方です

ね。

一　樹　坂の上で今度、工事が始まるんです。設計を頼まれて。

しげの　何が出来るの？　元、幼稚園があった所に。

一　樹　幼稚園があったんですか？

しげの　子どもの数が減っちゃって…。

一　樹　デイケアサービスの施設が出来るんですよ。

しげの　お年寄りの？

一　樹　ええ。

しげの　こんな不便な田舎に？

一　樹　送迎バスが出るそうですよ。…腹、減ったなぁ…。

しげの　（一樹が気の毒になる）…あの、これ。

一　樹　…え？

しげの　主人が忘れていったの。おいしいから。…さあ！

一　樹　いいんですか？

しげの　いいのよ。

一　樹　それじゃ遠慮なく。（食べる）う、うまい！　うまい！　桜の花がご飯の上にチラチラって。風流だなぁ…。

しげの　春だから。

一　樹　（ウッと泣く）

しげの　（驚いて）ど、どうしたの？

一　樹　ご主人、幸せだなあ。うちじゃ、ささいなことで言い合いばっかりしています。

しげの　そりゃ夫婦だから。うちだってけんかは日常茶飯事ですよ。

一　樹　教えてください！　どうすればおばさんとこみたいに夫婦が仲良く暮らせるのか！

しげの　そんなことを、突然言われても…。

ミツ（声）（唐突に）…川を、渡る…。

しげの　あっ、ミツさんの声だ！

しげの（Ｍ）５年前に亡くなった夫の母親のミツさんの声が私の胸に響いてきました。

ミツ（声）…川を、渡る…。けんかをしている時には夫婦が、川を渡っているんですよ。

しげの　よく言っていたわ。あたしたちがけんかをするたんびにいつもミツさん…。

修　造　しげの！　グズグズするなー！

しげの　分かった！

修　造　川幅が狭いのはこっちだぞー！

しげの　流れが緩いのはこの辺りよ！

修　造　浅瀬を選んでな！　おっと、大きな石が！

しげの　大丈夫よ！　さっ、早く渡りましょ

う！

しげの（M）けんかをしながらあたしたち、いくつもの川…川を一緒に渡ってきた。だから困ったことの激流に足をすくわれずに済んだのかも…。

しげの　（一樹に向き合う）…あのね、夫婦が仲良く暮らす秘けつは…。

一　樹　は、はい。

しげの　けんかをしている時でも、いつでも一緒に川を渡るってことなんだと思う…。

一　樹　…ハ、ハァ…。

しげの　私たち、結婚して45年が経つのよ。その間にはいろんなことがあったわ。娘は、小さな頃はぜんそく持ちだったし。息子は、サッカーの試合中に頭に大けがしたり…。受験に、就職に、結婚に。私の親が年を取ってからは介護もあったし。いろんなことが起きるたんびに私たちけんかばっかりしてた。でも、そんな時にも…今考えれば、川を一緒に渡ってきたんだと思う。

一　樹　川を…分かりました…。

しげの　川を渡れば渡るほど、夫婦って仲良しになれるものなのよ。

一　樹　ハイ！　…お弁当、ごちそうさまでした。おいくらですか。

しげの　いいのよ、そんな…。

一　樹　元気になれました。じゃあ…。

しげの　あなたと手をつないで川、川を一緒に渡るの。いいでしょ！

（カラス）

ミツ（声）　そうそう。春ですものね！

修　造　ただいまー。

しげの　おかえりなさーい。

修　造　お向かいの林さんにそこで会って。誘われて、つくし摘みに川まで行ってきた。

しげの　じゃ卵とじにしましょう。

修　造　危うく川へ落っこちそうになったよ。（笑う）

しげの　（笑って）大丈夫よ。私も一緒に。

修　造　うん？

《ラジオドラマ》第2回

「青空みたいに」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
石田明美　（29歳）　無職
客　１
客　２
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M）　私は丘のふもとの「坂下の店」と呼ばれている何でも屋を長い間やっています。しげのといいます。70歳です。

しげの（M）　５月となりました。

しげの　あなたー。行ってきまーす！

修　造　ど、どこへ？

しげの（M）　夫の修造です。元は小学校の校長で２つ年上です。

しげの　回覧板が回ってきたのよ。去年の夏に台風が来た時にみんなで公民館に避難をしたでしょ？

修　造　あ、ああ。

しげの　その時に足りなかった物を買い足すことになって、その説明会が開かれるのよ。お店番、よろしくねー。

修造　分かった。行っといで。今日は五月晴れだ！
客１　ごめんくださーい。
修造　あ、いらっしゃいませ。
客１　虫よけスプレーって置いてますか？
修造　えーっと、どこにあるんだったっけ…。
客１　奥さん、今日はお出掛け？
修造　え、ええ…。
客１　しげのさんならすぐに出してくれるのに。じゃ、また…。
修造　す、すみません…。
明美　おじさん。お久しぶりですねー。
修造　いらっしゃい。えーっと…。
明美　石田です。ほら、次の角を右に曲がった所の。
修造　あ、明美ちゃん…か？
明美　はい。昔、よくお菓子を買いにきた…。
修造　思い出しましたよ。高校を出た後すぐに働きに出たって、お母さんから伺ってますよ。今日はお休み？
明美　（あいまいに）え、ええ…。
修造　何を？
明美　ご飯茶わんって置いてますか？
修造　はい。下の押入れの、確か奥の方に…。すぐに取ってきてあげますから。
うーん…あっ。い、痛！
明美　ど、どうしたのですか？

修造　肩の筋を違えちゃったらしい…。い、いたた…。

明美　大丈夫ですか？

修造　何か貼っときゃすぐに良くなりますよ。

客２　こんにちはー。

修造　いらっしゃいませ。…何を。…あっ、いたっ。あいたたた…。

明美　おじさんは奥で休んでて。はい、何を差し上げましょうか。

客２　おしょうゆを頂きたいんですけど。

明美　濃い口のと薄口のとがありますけど。

客２　濃いのを。それと…。

明美　何でしょうか…。

客２　お砂糖も。

明美　はい、どうぞ。

客２　お会計は？

明美　（計算）５８０円です。（レジ音）
毎度ありがとうございます！

しげの（M）２時間ばかりが経ち、私が店へ戻ってみると…。

しげの　ど、どうしたの？　あなた！

修造　いや、それがな…。

しげの（M）夫は明美さんに助けてもらったことを私に話してくれました。

しげの　明美さん、あなたがもしもいてくれなかったらどうなっていたか。助かりました。本当に、本当にどうもありがとう！

明　美　そんなに心を込めてありがとうって言われたの、生まれて初めて…かも。…生まれて初めて…？

しげの　高校を出てすぐに働き始めて10年になります。毎日会社へ行って朝から晩まで働いてお給料をもらって…。

明　美　会社が先月倒産したのをきっかけに実家に戻って、今は就職活動中なんです。

しげの　それは大変だこと…。

明　美　いったん立ち止まってみると、人は何のために働くのかが、よく分からなくなっちゃって…。

しげの　何のために…？　そう言われてみると…。

ミツ（声）　しげのさん。人が働くのは人様のお役に立つためなのですよ。ハタがラクになるようにって…。

しげの　ミツさんの声だ！

しげの（M）　５年前に亡くなった夫の母親のミツさんの声が私の胸に響いてきました。

しげの　…ハタがラクに…？　明美さん！
明美　え？
しげの　あなたはうちの夫が痛い痛いって言ってるのを見て、すぐに助けてくれたでしょう。
明美　え、ええ。放っておけなくって。
修造　うれしかったなあ…。
しげの　それ。それなのよ！　ハタ・ラクって。
（カラス）
しげの　今日はね、公民館でお水に缶詰めに、液体ミルクの手配までしてきたのよ。
修造　ハタ・ラクの鑑（かがみ）だね。
しげの　楽しかったわ。
明美　こんばんはー。
しげの　明美さん！
明美　先ほどはどうも…。
しげの　いえ、こちらこそ。今頃なあに？
明美　お礼が言いたくって…。
しげの　お礼？
明美　はい。実家でしばらくのんびり過ごすつもりで、さっきはお茶わんを買いに来たんですけれども…。
修造　あ、そういえば…。
明美　いいんです、もう。自分のアパートへすぐに戻って、また就活を始めますから。おじさん、肩大丈夫ですか？

修造　ハハハ。もうすっかり治りましたよ。

しげの　あら！　明美ちゃんの目、何だかとってもキラキラしている！

明美　ええー。うれしい！

ミツ（声）しげのさん。人はね、助け合いっこをしていると生き生きとしてくるものなのですよ。瞳もキラキラって。ほら。今日の、あの５月の青空みたいに！

《ラジオドラマ》第３回

「釣れますか？」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
中元透　（21歳）　建設作業員
吉井太郎　（75歳）　釣り人
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M） 私はなだらかな丘を下った所にある「坂下の店」、何でも屋を嫁いできてからずっとやっています。しげのといいます。70歳です。

しげの（M） ５月も終わりとなりました。

修　造 しげのー。カレンダー、６月のにめくっといたぞ。

しげの ありがとう！

修　造 忘れるといかんからな。

しげの（M） 夫の修造です。元小学校の校長先生で72歳となります。

透 ごめんくださーい。

しげの お客さんだ。いらっしゃーい。

透 コーラ。デカいの。

しげの 普通サイズのしか…。

透 じゃそれで。いくら？

しげの　１４０円です。

透　２００円で。

しげの　お釣りね。（レジ音）はい、60円。毎度ありがとうございます。

透　俺、ここ、今日初めてなんだけど。

しげの　坂の上の工事の方なんでしょう？

透　よく知ってますね。

しげの　この辺りの人はみんな顔見知りなの。工事は始まったばかりだから、しばらくは坂の上にいるんでしょ。ここが一番近いお店だから今日からあなたも「おなじみさん」よ。よろしくね！

透　ずっといるかどうだか…。

しげの　えっ？

透　腹が時々痛くなって…。（コーラゴクゴクと飲む）い、いたっ…あいたたた。

しげの　だ、大丈夫？

透　ガミガミ言われると俺、いつも痛くなるんですよ、腹…。

しげの　誰にガミガミ言われるの？

透　誰にって…（突然）い、いたっ。あいたっ。あいたたた…！（うずくまる）

しげの　た、大変！　あ、あなたー！　あなたー！

しげの（M）坂の上の工事現場で働いている青年を夫が介抱して、奥の部屋へ寝か

せてあげました。そこへ…。

太郎　コンチワー。

しげの　太郎さん。いらっしゃーい。

太郎　いる？

しげの　はい。あなたー、太郎さんですよー。

修造　やあ。太郎さん。釣りですか？　もうお昼だよ。

太郎　朝から出掛けて、昼飯食って、これからまた行くんだよ。釣り糸ちょうだい。

修造　一番安い、いつものあれ？

太郎　いや、一番高いのを。

修造　ええーっ。

太郎　釣れんのよ、朝から。ゴールデンウィークで大勢の釣り人がやってきて、荒らされちまったんだなあ。困って釣り場をあちこち変えてはみたんだけれども…。

ミツ（声）　釣り場は、変えるな！

しげの（M）　５年前に亡くなった夫の母親のミツさんの声が私の胸に響いてきました。

しげの　あ、そういえばミツさんが…。

修造　言ってたなあ。釣りの下手な人は、「ここでは釣れん」と言って釣り場所を転々と変える。だが、釣りの達

人は、魚が掛からないと知るや自分の釣りざおを上げて、「エサはこれで良かったのか？」「重りは？」「糸の長さは？」「ウキは？」って自分の仕掛けを洗いざらい調べて、悪いところに気が付いたならば、すぐに改めるんだって。

しげの　うまく釣れないからってそれを人のせいにしちゃいけないわ、太郎さん。

修　造　釣り場所は変えずに、自分の釣りの腕をもっともっと磨くんだな。じゃ、行っといでー。

太　郎　はい、行ってきまーす！

透　あの…。

しげの　あら！　どう？　おなかの調子は？

透　な、治りました。奥でいい話を聞かせてもらったから。

夫　婦　いい話？

透　…俺、高校を途中から行けなくなって、バイトで店員とか…。工事現場で働いたことも多いんだけど、いつも上の人から注意ってのかな、怒られてばかりで。そのたんびに俺、ムカッとして仕事辞めちゃまた次の仕事。そんなふうに、ええーっと…魚を釣る場所を変えまくってきたんだけど、今の話を聞いて…俺にも、悪いところがあったんじゃないかなって。

修　造　…そうか…。

しげの　良かったわねぇ。あったかいお茶でも？　今、淹れるから…。

透　いえ。早く現場に戻らなけりゃ。僕、中元透といいます。「おなじみさん」になれたから、また、ちょくちょく来ます。

しげの　待っているわね、透さん。お仕事、あんまり無理をせずに…。

透　はい！（去る）

しげの（M）しばらくすると太郎さんがハァハァ言いながら駆け戻ってきました。大きいのが釣れたんですって！

修造　ええ？　場所は変えないで？

しげの　良かったわねえ！

ミツ（声）しげのさん。人間だから、時には不平不満の心が頭をもたげて、今自分がいる場所を変えてみたくもなるものなのですよ。でもね、そんな時にこそ自分自身を振り返るいいチャンスだと思えばいいんですよ。

《ラジオドラマ》第４回

「お茶にしましょ。」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
三谷トモ　（68歳）　和裁師
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M） 私は、なだらかな丘の下の何でも屋「坂下の店」を、嫁いできてからずっとやっています。しげのといいます。70歳です。

しげの（M） ６月となりました。

しげの あなたー。午後から雨が降るんですって。

修　造 じゃ、今のうちに行ってくるか。

しげの（M） 夫の修造です。２つ年上で元は小学校の校長先生です。日課の散歩に出掛けていきました。ところが、３分も経たないうちに…。

修　造 ただいまー。

しげの 早過ぎやしない？

修　造 そこでトモさんと出会ってな。

しげの いらっしゃーい、トモさん。

トモ　こんにちはー。
しげの　お元気そうで何より。今日は？
トモ　段ボールをもらいにきたのよ。
しげの　大きさは？
トモ　できれば一番大きいのを。
修造　しげの…。トモさんな、お引っ越しをなさるんだと。
しげの　お、お引っ越し？
トモ　そう。やんなっちゃう。仕立物の仕事を長年くれていた、ほら、あの呉服屋さんが…。
しげの　駅前の？
トモ　お店を急に畳むことになっちゃって。
しげの　今じゃ和服着る人が減っちゃったからねえ。
トモ　お払い箱になっちゃったのよ。年金だけじゃね。今のアパート…。
修造　家賃が高くて…なんだそうだよ。「段ボールは私が運びましょう」ってことで一緒に戻ってきたんだよ。
しげの（M）夫は段ボールを持ち、トモさんの住むアパートへと向かいました。
ミツ（声）しげのさん。お土地の神様を、大切に…。
しげの　ミツさんの声だ！

しげの（Ｍ） ５年前に亡くなった夫の母親のミツさんの声が私の胸に響いてきました。

ミツ（声） しげのさん。天に神様がいらっしゃるのと同じように、大地にも神様がいらっしゃるんですよ。私たちが住んでるこのお土地を、建物を、いつでも、どんな時にでも守ってくださっているありがたい神様のことを決して忘れてはなりませんよ。

しげの あっ、そうだ！　このこと、トモさんにも！

しげの（Ｍ） トモさんのアパートへ私も急ぎました。

しげの トモさん。お土地の神様と建物にいつも感謝をしていると、お掃除が自然と楽しくなるものなのよ。（ほうきで畳を掃く）ほら、こうやって。ほら、こうやって…。

修　造 おふくろがよくやっていたなあ。

ト　モ 話には聞いていたけれども、お茶を淹れた後の葉っぱを、畳にまいてお掃除をするだなんて。ホント！　奇麗になった！　気分がいいわー！

しげの どこへ行ってもお土地の神様のこと、そして住まわせてもらっている

建物のことを忘れずにいればきっと…きっとあなたのことを守ってくださるわ！

トモ　長い間住まわせていただいていたのに、お礼の一つも言わずに…。ご、ごめんなさいねー。（今にも泣き出さんばかりに）

しげの　…ト、トモさん…！

しげの（M）それから1週間ばかりが経ちました。

トモ　こんにちはー。

しげの　…ト、トモさん。

トモ　（感動して涙ながらに）し、しげのさん。あ、ありがとう！

しげの　何のこと？

トモ　しげのさん。こんなことって…。

しげの　えっ？

トモ　あるのかしら…。大家さんが…。

しげの　…アパートの？

トモ　ええ。家賃はずっと安くするから今までどおりに住んでいてほしい、ですって。

しげの　まあー！

トモ　本当にいらっしゃるのねえ、お土地の神様って。これからは朝に晩に手を合わせるわ。お茶ガラを使ってお掃除も頑張る！　しげのさん。これからもお茶をたくさん買いに…あ

しげの　っ、今日もお茶を1袋下さいな。
トモ　ハイ、ハイ。いつものでで？
しげの　ええ。
トモ　５４０円です。
しげの　ちょうどあったわ。しげのさん、本当にどうもありがとう！
　これからも末長くごひいきにー！

（雨）

しげの　…あ、雨だわ。トモさん、濡れなかったかしら…。
修造　もうアパートに着いてるよ。お茶、飲んでるよ。（お茶　飲む）
しげの　そうだといいけれど…。（お茶　飲む）ああ、おいしい！　…あ、お土地の神様にも、お茶をお供えしましょうね。（ガラス戸　開ける）…アラ、アジサイの花…。日ごとに色が濃くなるわ。…奇麗！
ミツ（声）　しげのさん…。神様に、いつも守られているから、アジサイは毎年こうして花を咲かせることができるんですよ。人間だって、奇麗な花を咲かせなければ。ねっ！

《ラジオドラマ》第5回

「捨てちゃえ捨てちゃえ」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
大橋優　（52歳）　公務員
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M） 私は丘のふもとにある「坂下の店」と呼ばれている何でも屋をやっています。嫁いできてからもう45年も。しげのといいます。70歳です。

しげの（M） ８月となりました。

修　造　しげのー。じゃ、散歩に行ってくるぞー。

しげの（M） 夫の修造です。２つ年上の72歳で元は小学校の校長先生です。

優　ごめんくださーい。

しげの　はい、いらっしゃーい。

優　…あの、お水…。

しげの　お水ならば、飲めますよ。ほら、その水道水を。

優　ハ、ハァ。それじゃあ…。（水道水飲む）

しげの　ここらじゃ見掛けない方ですけど…。

優　（それには答えずに）…あの、制汗剤。置いてますか？

しげの　セ、セイカンザイ、ですか？

優　脇の下に塗って、ほら、汗を止める…。

しげの　（弱って）ウチは、薬局じゃないんで…。

優　あ、そうでしたね。じゃ…。（去りかける）

しげの　（慌てて）ちょ、ちょっと、ちょっと待って！　ええっと…。（奥へ入って）

優　…え？

しげの　…はいはいはい。（すぐに戻ってくる）はい、お酢よ。

優　…お酢、ですか？

しげの　ええ。この水道水にね、お酢をちょいと垂らして…。タオルを浸して。（タオルの水　絞る）さあ、拭いてごらんなさい。脇の下の汗の臭いが、たちまち消えて無くなるから。ハイ。

優　（拭く）わぁーっ。気持ちがいいー！本当だ。何にも臭わない。あ、ありがとうございました！

しげの　お役に立てて良かったわ。…ここへは、セールスか何かで？

優　仕事ではないんです。でも、人生の大仕事…。勇気を振り絞ってここまでやってはきたんですけれども…。（何かを言いかけて口をつぐむ）

しげの　人生の大仕事、あるうちが花よ。おばさんみたいに人生も終わりに近付いてくると、そんなものに立ち向かおうっていう気力が…。ハー、もう無くなっちゃって…。何なの？　その人生の大仕事って。

優　（弱って）あ、あのー。

しげの　ごめんなさい。いいのよ、別に…。

優　プロポーズをしにいくんです。この坂の上に住む、ある女性のお宅へ。

しげの　プ、プロポーズ？

優　…お水、ごちそうさまでした。

しげの（M）彼はそう言うと、肩を落として店から出てゆきました。

修造　ただいまー。

しげの　お帰りなさーい。

修造　今のお客さん。ここらじゃ見掛けん人だが…。

しげの　…あなた！　お店番、よろしくっ！

しげの（M）私は慌てて彼の後を追ってゆきました。

しげの　ちょっとー！　そっちは川よー！　さっきは坂の上に行くって。

優　プロポーズは、もうやめようかなって…。

しげの　えぇーっ！

優　じゃ…。

しげの（M）彼は坂とは反対の方へ向かって背中を丸めて歩いていくではありませんか。

しげの　ま、待って！　待ってー！　ね、何をそんなに困っているの？

優　僕はもう52歳になるんです。転勤だとか、親の介護だとか、いろいろあって。

しげの　そ、そうなの…。

優　彼女、前の旦那さんに暴力を振るわれて…。離婚して…。

しげの　ご苦労をなさったのねえ。じゃあ今度は、あなたがその分まで彼女を幸せにして差し上げなきゃ。

優　…双子が、いるんです。中学生の男の子と女の子の…。反対されたらどうしようかと思って。足がすくんで。困ったー！　ああ、困った！　ああ、困ったー！

ミツ（声）それを困る、私が、困る…。

しげの　ミツさんの声だわ！

しげの（M）５年前に亡くなった夫の母親のミツさんの声が私の胸に響いてきました。

ミツ（声）しげのさん。困った出来事というの

は、いつでもあるものなのよ、生きてる限りは。でもね、よく考えてみると、一番困るのは、それに困っている私自身なんではないのかしら…。

しげの　…あの、お名前を、伺ってもいいかしら…。

優　…優。大橋優といいます。

しげの　…優さん。困った出来事はもうどうしようもないのよ。でも自分の心を変えることは…。

優　…自分の心を、変えるのですか？

しげの　そう。困っている自分の心、それを思い切って捨てる！　なかなかできることじゃないけれども…。あっ、そうだ！　この石を拾って…

しげの（M）　私はとっさに足元に落ちている石を２つ拾い、彼にも持たせてやりました。

しげの　私にも困ったことがあるのよ。

優　おばさんにも？

しげの　だからあなたと一緒にこの石、川へ投げ捨てちゃう。じゃいくわよー！　困った私にさようならー！　エーイ！

優　（つられて）困った俺にさようならー。エーイ！

しげの　さあ、これでもう大丈夫よ！　じゃ
行ってらっしゃーい！

優　ハ、ハイ。それじゃ、行ってきます。

しげの（M）　夕方になりました。

優　ごめんください。

しげの　あら、優さん！　どうだった？

優　大成功でした、プロポーズ！

しげの　ヤッター！

優　おばさんのおかげです。ありがとう
ございました。…ところでおばさん
の困ったことって何だったんです
か？

しげの　え？　何だったかしら…。忘れちゃ
った。

ミツ（声）　困った自分に困らない。心の中のモ
ヤモヤ、捨てるお稽古をいつでも忘
れずに。ねっ！

《ラジオドラマ》第6回

「月の美しい夜に」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
細井たまえ　（50代）　主婦
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M） 私は田舎町の坂下にある何でも屋を長い間やっています。しげのといいます。70歳です。

しげの（M） ９月となりました。

しげの　あなたー。出たわよーっ、お月さまが。

修　造　今夜は中秋の名月か。奇麗だねぇ…。

（ガラス戸　たたく）

たまえ　ちょ、ちょっとちょっと。しげのさーん！

しげの　だぁれ？

たまえ　私よ。

しげの（M） ご近所に住む細井たまえさんでした。

しげの　（店の戸　開ける）たまえさんじゃ

たまえ　ないの！　どうかしたの？　こんな夜更けに…。
しげの　まだ9時じゃないの。お塩、２袋。
たまえ　ううん、３袋ちょうだい。
しげの　な、何だってまたそんなにたくさん…。
たまえ　フライパンで煎って撒くのよ、主人の部屋に。
しげの　（驚いて）今から？　何で？
たまえ　浮気封じなのよ。
しげの　ええーっ！
たまえ　見付けちゃったのよ。主人の机の上に、書き掛けのラブレターを。
しげの　そ、そんな！
たまえ　私はただの一度だって浮気をしたことなんかないのに。今夜は学生時代の友達と飲んでくるだとか何とか言っちゃって。う、うそよ！　く、悔しー！
しげの　ハ、ハァ…。じゃこれ。（お塩を渡す）１袋、185円だから…。
たまえ　あっ、うっかりしてお財布持ってくるのを忘れちゃった！　悪いけど明日ねー！（去る）
しげの（M）十五夜のお月様は雲間に隠れることもなく、私を待っていてくれました。
修　造　しげの。お茶、新しいのと取り替え

といたぞ。

しげの　ありがとう。私、シアワセ…。

修造　うん？

しげの　たまえさんのご主人ね、浮気をしているんですって。

修造　七面鳥みたいな顔をした、あのご亭主が？

しげの　それで浮気封じのために。

修造　塩を撒くのか？

しげの　たまえさんのあの性格じゃ、ご主人の浮気に辛抱できるわけがないわよねえ。

修造　当然だよ。辛抱し続けて男を甘やかしちゃならんよ。そういえばおふくろが、よく言ってたなあ…。

しげの　言ってましたねえ。

ミツ（声）　しげのさん。「しんぼう」には２つのしんぼうがあるのよ。

修造　おふくろとは、しげのは仲が良かったからなあ。２人でこの店を守って…。気を使うこともあっただろうに…。

しげの　互いにしんぼうをし合っていたのかもしれません。でも2つのしんぼうのうちの良い方のしんぼうをしていたから…。

ミツ（声）　しげのさん。しんぼうという字を、

書いてごらんなさい。漢字で。「辛さ」を「抱く」。そう書くでしょう？

しげの　は、はい。

ミツ（声）　辛さを抱いたりしてはいけませんよ。身体を壊してしまいますから。もう一つのしんぼうをすればいいの。

しげの　何ですか。その、もう一つのしんぼうって。

ミツ（声）　「辛抱」と「神抱」。耳で聞けば同じだけれど、もう一つのしんぼうは、「神」に「抱かれる」と、そう書くのよ。

しげの　…神様に…抱かれる…。こんなに安心なことはありません！

（ニワトリ）

たまえ　おはようございまーす。

しげの　あ、たまえさん。いらっしゃい。

たまえ　昨日のお塩の代金を持ってきたのよ。ハイ。

しげの　いつでも良かったのに。…大丈夫？

たまえ　何が？

しげの　辛抱することとなんかないのよ。ご主

人が浮気をしたとしても神様にしっかり抱いてもらって…。

たまえ　何を言ってるの？

しげの　あなたがご主人の浮気で落ち込んでやしないかって、私は心配で…。

たまえ　あ、そのこと？　主人ね、昨日の夜遅く帰ってきたのよ。「飲み会は断った。ラブレターの締め切りのことで頭がいっぱいだ」とか言って…。

しげの　ラ、ラブレターの締め切り？

たまえ　文芸雑誌の懸賞に応募するんですって。「月の美しい夜にあなたに送るラブレター」っていうの。賞金は百万円なり！

しげの　（仰天　脱力）…そ、そうだったの…。

（カラス）

修　造　どうだい？　しげの。俺が作った今夜のカレーの味は。

しげの　「男子、厨房に入って女房をうならす一品」っていうコンテストに応募してみたら？

修　造　（笑って）それなら浮気と勘違いされることもないしな。

しげの　（食べる）わっ。か、辛ーい！　のどが！　み、水！　お水――！

ミツ（声）（笑って）しげのさん、大丈夫です

よ、甘くたって辛くたって。神様に抱かれてさえいれば、いつでも、どんな時にでも、安心なのですよ。

《ラジオドラマ》第7回

「ヤッちゃんの修行」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
浜田安夫　（28歳）　雑貨問屋の従業員
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M） 私はなだらかな丘の下にある何でも屋を長い間やっています。しげのといいます。70歳です。

しげの（M） 10月となりました。食欲の秋です。

しげの いたっ。おなかが。あいたた…。

修　造 食い過ぎたのかな？

しげの もったいないから残すなよって。

修　造 年を取ったなら胃袋と相談することだな。あれ…俺も…いた、あいたた…。

しげの（M） 夫の修造です。２つ年上の72歳で元は小学校の校長先生です。

（ケータイ　メール着信）

しげの メールだわ。美弥子から。何ですって？「看病には行かれません」ですって。

修　造　娘が俺と同じ教師の道へ進んでくれたのはうれしいが、教師はなかなか休みが取れんもんなんだ。

しげの　「おばあちゃんの代から1日も休まずに…なんて今時古いわよ。お店、もう辞めたら？」ですって。メールで。

修　造　この店も、そろそろ閉め時なのかもな。

しげの（M）　翌朝となりました。２人ともおなかはすっかり治って…。

しげの　あ、いらっしゃいませ。昨日はごめんなさい。トイレットペーパー？

あら、切らしちゃってたわ。今日、問屋さんが持ってくるから…。

しげの（M）　やれやれ。昨日一日ゆっくり休んじゃったから腰が痛むわ。はー。

しげの（M）　うちの店の前をトラックが突っ走って。そして…。

（トラック　急停車）

しげの　わーっ。ど、どうしたのかしら…。（表へ出る）ヤッちゃんじゃないの！だ、大丈夫？

安　夫　（泣き出しそうになりながら）お、

おばさーん！

しげの（M）うちの店にいつもトイレットペーパーなどの雑貨を卸してくれている問屋さんのヤッちゃんでした。

しげの　ヤッちゃん、この先には川があるのよ。危うくドボーンじゃないの。

安夫　す、すみませんでした。居眠りしちゃって。

しげの　ええーっ。さ、早く、早く車から降りて。

安夫　は、はあ。どっこらしょっと。あわわわ…。（大あくび）

修造　運ぶの俺も手伝ってやるからさ。さ、早く、早く店の中へ。

一同　よっこらしょ！　よっこらしょ！

安夫　ふー。ほんとにすみませんでした。車の運転、朝の5時からして、商品運んで、次の注文また取って。飯食う暇もなくって。さっきそば屋で腹一杯になったら、ついウトウトって…。

修造　毎日大変だなぁ…。しげの、コーヒー1杯、ヤッちゃんに。

しげの　あ、はいはい。

しげの（M）夫が奥の部屋にヤッちゃんを寝かせてあげました。コーヒーを少しだけ飲んで昼寝をすると、目覚めた後、

元気になるんですって。

しげの　ヤッちゃんの会社ね、いろいろ大変なんですって。交通事故でも起こしたらって気が気じゃないわ。お休み、少しでも取れないのかしら…。

修　造　…お前だって…。

しげの　…え？

修　造　おふくろがいた時分にゃ２人でやっていたから。でもおふくろが亡くなってからは…。

しげの　あなたがいるじゃないの。長い間のお勤めから解放されたあなたが。お店番、当てにしているのよ。

修　造　（苦笑する）旅行に連れて行ってやることもできなかったし…。これからは時々は休みも取って…。

しげの　でも近所の人たちに悪いわ。困るでしょうから、昨日みたいに。

ミツ（声）　…休息は、修行。

しげの　ミツさんの声だ！

しげの（M）　５年前に亡くなった夫の母親のミツさんの声が、私の胸に響いてきました。

ミツ（声）　しげのさん。もしも働きすぎて死んでしまったら、元も子もなくなって

しまうでしょう？　分かっているのに人はなかなか休もうとはしない。神様から賜った大切な命、体…。大切に使わせていただかなければ…。人様のお役に立つためにねっ。だから「休息は修行」なのよ。

しげの　（つぶやく）…ミツさん。私は、滝に打たれたり、断食することはできないけれども、心して休む、それならばできる…かもしれません。「修行」なんですものねえ…。

しげの（M）　ヤッちゃんが起きてきました。

しげの　ヤッちゃん。どう？　少しは疲れが取れた？

安夫　はいっ。おかげさまで…。

修造　修行は大切だぞ。

安夫　えっ。もっともっと働けってことですか？

しげの　（笑って）違うわよ。時にはしっかり体と心を休ませてあげる。それは大切な修行なのよ。時々はお休みを取りながら、私もこの店続けてゆこう！

ミツ（声）　そうそう。時には、自分の心と身体の声に、静かに耳を傾けて…。ねっ！

《ラジオドラマ》第８回

「餅つきの後で」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
中村憲太　（13歳）　中学校一年生
中村良子　（40歳）　憲太の母
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M） 坂の下にあるということから「坂下の店」と呼ばれている何でも屋をやっている私はしげのです。70歳です。

しげの（M） 今年も年の暮れとなりました。

（餅つき）

修　造 しげのー。餅とり粉を持ってきてくれー。

しげの（M） 夫の修造です。２つ年上で元は小学校の校長先生です。

良　子 こんにちはー。

しげの（M） 坂の途中のマンションに住むお母さんと中学生の息子さんが店の前へやってきました。

良子　あの、お仲間に入れていただけたらなって。

しげの　どうぞどうぞ。

修造　見ているだけならそこのたき火のそばで。お餅つくのなら…。

良子　憲太、おまえ、お餅ついてみる？

憲太　うん！

修造　これは、きねだ。さあ、やってごらん！　右手が上で、左手が下だ。

憲太　こうだね。せーの！

修造　ほっ！　ペッタン…よいしょ！　ペッタン…。

憲太　えーい！　ペッタン…ペッタン…。

修造　（叫ぶ）い、いたっ。あいたたた…。

憲太　ご、ごめんなさーい。

良子　（オロオロして）憲太。おじさんの手、手をよく見て…。

憲太　おじさんが手を引っ込めなかったからじゃないか！

良子　またそうやって口答えをする。だからお父さんとけんかばっかりしているのよ。

憲太　お父さん。一人でカンボジアへ行けばいいんだ。何だ、こんなの！　えーい！（きねを投げ捨てる）

良子　な、何をするのよ！

憲太　僕、帰る！（去る）

良子　憲太！　…きねが…汚れてしまって…。

修造　い、いやいや…。

良　子　す、すみません。後ほどおわびに。憲太！　ま、待ちなさーい！（憲太を追って去る）

修　造　大丈夫かなあ…。

しげの（M）お餅つきが終わりました。鏡餅を神様とご先祖様にお供えして、私たちはつきたてのお餅を頂きました。

修　造　うまい！　あんころ餅も良いが、辛味餅も…。

良　子　ごめんくださーい。

しげの　お客さんだわ。は、はーい！

良　子　先ほどはどうも…。

しげの　あ、憲太君のお母さん。

良　子　…おわびに伺ったんです。ご主人様の手、いかがですか？

修　造　ややあ。

良　子　どうもすみませんでした。あ、あの…。

修　造　もう何ともないですよ。さっきからおはしを使ってパクパクと。お母さんもご一緒にいかがですか？

良　子　い、いいんですか？

しげの　甘いのでも辛いのでも。さあどうぞ。

良　子　では、遠慮なく…。（食べる）…おいしい！　…家族って…。

しげの　…えっ？

良　子　こんなにも…こんなにも平和なものなのかしらって…。主人が来年の春

にカンボジアへ転勤することが決まってから、息子荒れちゃって。転校はしたくないって。昔は素直でいい子でしたのに…。

しげの　息子さん、中学生？

良子　はい。1年生です。

しげの　じゃ、反抗期なんじゃありませんか？

良子　…はい。どんなに言っても、懇切丁寧に説明をしてやっても、いくら口を酸っぱくして注意をしてやっても…。

しげの　（苦笑い）うちの息子もそうだったわ。自立に向かって歩き出す時期がやってきたんですよ。だからお母さんも必死になってそんな息子さんと一緒に歩いてあげなきゃ！

良子　…私が、息子と…一緒に歩く…？

修造　そうそう。おふくろがよく言ってたなあ…。

ミツ（声）　しげのさん。父親も母親も、子どもと同時に生まれたの。だから育たなければならないのよ。子どもと一緒にお父さんも、お母さんも…。

しげの（M）　5年前に亡くなった夫の母親のミツさんの声が、私の胸に響いてきました。

しげの　（しみじみと）お餅つきと同じなんですねえ、子育てって。
良子　…お餅つきと？
しげの　（笑って）だって手を引っ込める時に、引っ込めないと…。
修造　あいたたたっ…！　と、なるからなあ。（これも笑う）
良子　…あの、どういう意味なのでしょうか…？
しげの（M）私は憲太君のお母さんにミツさんの言葉の意味を伝えました。
しげの（M）次の日となりました。

憲太　おじさーん。おばさーん。
しげの　憲太君！　いらっしゃーい。（奥に向かって）あなたー。
修造　いらっしゃい。
憲太　昨日、母がお土産にもらってきたお餅のお皿を返しにきました。
しげの　いつだって良かったのに。おいしかった？
憲太　お餅もおいしかったけど、お母さんが何だか変わって…。
しげの　どういうこと？
憲太　いつもガミガミ叱るばかりで僕の言うことをちっとも聞いてくれなかったのに…。
しげの　…えっ？

憲　太　「憲太を信頼してるから」って。「お父さんの転勤についていくかどうかってことも、よく話し合って決めましょうね」って。

しげの　それは良かった。

修　造　良かったな。

憲　太　じゃ、また…。（去る）

ミツ（声）　しげのさん、そうですよ。子どもに親があれこれと手を掛けているうちは、神様は、自分の出番じゃないと思って、手を出しにくいものなのですよ。

《ラジオドラマ》最終回

「春よ来い」

登場人物

瀬戸内しげの　（70歳）　坂下の店の主人
瀬戸内修造　（72歳）　しげのの夫
鈴木（父）　（95歳）　近所の隠居
鈴木浩　（60歳）　鈴木の息子
ミツ（声）　（故人）　修造の母

しげの（M）　私はしげのです。70歳です。丘のふもとにある何でも屋に嫁いできてから45年が経ちました。

しげの（M）　元旦となりました。

修　造　あけましておめでとう。

しげの　今年もよろしくお願いします。

しげの（M）　夫の修造です。２つ年上の72歳で元は小学校の校長先生です。

修　造　（雨戸開ける）うわーっ！　ゆ、雪だー！

しげの　昨日の晩から降り出したんですね。

（雪かき）

修　造　誰かが雪かきを…。わあーっ。鈴木さんじゃありませんか！

しげの（M）ご近所の鈴木さんでした。亡くなった夫の母親のミツさんと同い年ですから95歳となります。

しげの　鈴木さん！

鈴　木　おはよう。ミツさんが大変じゃろうと思うて…。

修　造　え、おふくろが？　…あ、ああ、鈴木さん！　びしょぬれじゃありませんか。

しげの　風邪でも引いたら大変！　さ、早く中へ！

しげの　鈴木さん。甘酒をお一つ。あったまりますよ。

鈴　木　ヤ、ありがとう！（甘酒飲む）あー、うまい！　ミツさんの手作りはやはり違う！

しげの　（弱って）それはスーパーで買ってきたものなの。作り方をミツさんから教わっとけば良かったんですけど。

修　造　しげの。鈴木さんのお宅に早くご連絡を。

しげの　あ、そ、そうでしたね。

しげの（M）私は鈴木さんの家へ電話を掛けました。

浩（声）ええーッ！　親父が　よ、良かっ

た！　起きてみたら親父がいないので、困り果てていたんですよ。す、すぐに迎えにいきます！（電話切れる）

しげの　（修造に）あなた、すぐに迎えに来られるって。息子さん、困ってらしたわよ。

鈴　木　わしはミツさんからよう聞いとるぞ。「困っても困らない」生き方というものを。

ミツ（声）鈴木さん。私たちはね、神様の大きな懐の中に生かされているんですよ。でもその懐は大きすぎて、誰にも見えないのよ。だから、人は困る。

しげの　鈴木さん。私はミツさんとここで40年も一緒に暮らしてきたけど、ただの一度だって聞いたことがありません。困っても困らない生き方なんて…。

鈴　木　ミツさんはな、わしの目の前で、まずこの親指と人さし指で丸を作って、「これは見えるでしょ」と言ってな。それから、次は、両手を大きく頭の上から、横、下へ広げて丸を作って見せてくれた。

しげの　へーえ。

鈴　木　それでな、こう言ったんじゃ。「人の目に見えるのは、限られたもの。大きな大きなものは見えない。だか

しげの　ら人は神様が見えないのよ…」。

鈴　木　…大きいから、神様は…見えない…。

しげの　その大きな神様がいつでも一緒にいてくださる、守っていてくださるのじゃと。だから…。

浩　　　困っても、困らない！

しげの　ごめんくださーい。

浩　　　息子さんだわ。は、はーい！

鈴　木　ご迷惑をお掛けしました。すぐに連れて帰ります。お父さーん。お父さーん！

浩　　　？　な、何だ？　もう、うるさいな。

しげの　何だじゃないですよ。どれだけ心配をしたか。どれだけ困ったか…。

浩　　　浩さん。腕を大きく上に回して。

しげの　え？　な、何なんですか？

鈴　木　言うても無駄じゃ。分からん。…さ、早う帰ろう！

浩　　　そうそう。もう黙って家を出ていかないでくださいよ！　じゃ、どうも！（去る）

しげの　鈴木さん、どうもありがとうございました－。

しげの（M）鈴木さんの後ろ姿をいつまでもミツさんが見送っているような気がしました。

（年賀状　投函）

しげの　年賀状が届いたわ。美弥子からだ。今年もイラストがかわいいわー。

修　造　達也からは？

しげの　（探しながら）届いているわよ。こっちは家族写真だわ。２人とも孫たちを連れて３日の日に来るって。

修　造　あさってか…。待ち遠しいなあ。

しげの　あなた！

修　造　ん？

しげの　元日は休みますけど、明日からお店は開けますからね。丘のふもとの「坂下の小さな店」。もうすぐ春が、春がやってくる！

ミツ（声）しげのさん。春はね、見えないけれども、いつでも私たちの心の中にいらっしゃる神様が…神様が運んできてくださるんですよ。春よ、来い！

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　0865-42-6453

FAX　0865-42-2114

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
朝　日　放　送	日曜日	あさ5時40分
ＲＫＢ毎日放送	日曜日	あさ6時50分

こころで聴くおはなし　検索